様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 １０ 日現在

機関番号：１５３０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2018
課題番号：１５Ｋ０２５６９

研究課題名（和文）琉球方言発達過程解明のための宮古群島域における言語地理学的研究

研究課題名（英文）The Geolinguistics Study to Elucidate the Developmental Process of Ryukyu Dialect in the Miyako Island Group

研究代表者
又吉　里美（MATAYOSHI, SATOMI）

岡山大学・教育学研究科・准教授

研究者番号：６０５１３３６４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、宮古群島域を対象に、音声・語彙を中心とした地域差に注目した調査を実施し、下記の成果を得た。(1)宮古群島方言に特異な音声特徴について、離島も含めたすべての地域を統一的調査票による調査でカバーした。特に重要な音声特徴に特化して、全36地点で詳細な調査が実施できた。(2)それらの音声特徴の歴史的発達に関し、言語地理学的手法を適用して検証した。特に、母音の中舌化⇒舌先の上部への極端な接近⇒そり舌側面音化、のような変化の過程の推定が可能になった。(3)発音特徴の検証に重要となる映像資料をほぼ全域について作成し、研究用だけでなく、現地次世代の方言継承にも利する資料が構築できた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　学術的意義については次のとおりである。宮古群島域を対象に、音声・語彙を中心とした地域差に注目した調査を実施し、離島も含めたすべての地域を統一的調査票による調査でカバーした。特に重要な音声特徴に特化して、全36地点で詳細な調査を実施したことは、琉球方言の音声研究に貢献するものである。
　社会的意義については次のとおりである。方言学習の課題として、①方言学習の目標について、②教員の方言学習に対する態度、③方言学習に必要な教材、④カリキュラム上の課題、地域の課題、の４つの観点から課題を整理し提示した。また、方言の次世代への継承に利する優れた資料として宮古群島域方言言語地図を作成した。

研究成果の概要（英文）：Our research established the following:1. For the Miyako Islands, the phonetic features under discussion can be roughly categorized in the following three types: a syllabic retroflex lateral sound, an approximant accompanied with friction noise, and an approximant central vowel.2. Cross-type simultaneous use and intermediate pronunciation variants are in actual fact observed, making the above categorization problematic. However, it is still considered useful as a general guide to regional variation, and as data that offers further clues for reconstructing the evolution of these phonetic features.3.There are some argument about learning Miyako dialects at school.Especially, How to manage with these phonetic variations in passing on the dialects to the younger generation?

研究分野：日本語学

キーワード：日本語学　琉球方言　宮古方言　言語地理学

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９、ＣＫ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

本研究の背景としては、大きく二つのことが挙げられる。一つは、領域内の地域差を射程に入れた統一的調査研究から言語変化を捉えることである。二つは、急速な言語変化と消失の中において多様な言語資料の収集である。

まず、前者について述べれば下記のとおりである。南西諸島の諸方言（諸言語）については「消滅の危機に瀕した方言（言語）」との認識が共有され、その中で宮古群島域は地域言語が比較的よく保存されていることで知られ、さまざまな取り組みがなされてきた。狩俣繁久らによる広域的調査研究や、田窪行則らによる言語文化全体を射程とした取組みのほか、若手研究者による総合的記述も盛んなされている。これらの研究は主に、宮古群島諸地域の方言における記述的研究を中心としたものである。一方で、宮古群島域では中舌母音に強い摩擦噪音を伴うものや、成節的流音が知られている。こうした変種は、南西諸島全体を覆う母音の狭母音化の流れの中で、どのように位置づけられるのだろうか。これまでは群島内の特定地域の音声的変種を基準にした音韻解釈をめぐる議論が中心で、地域差は注目されることが少なかった。しかし、沖縄本島を中心とした子音の口蓋化も含めて、狭母音化に連動して起こったと考えられる変化全体を捉えなおすことは、琉球方言発達の解明にとって重要なポイントとなるはずである。地域差を言語変化の推定につなげる言語地理学的手法の適用によって、言語史の再構をめざし、共時的観点による個別言語の実態の把握とともに通時的観点による言語のダイナミックな動きを捉えることを目指した。

次に、後者については下記のとおりである。宮古島・伊良部島地域に展開する言語特徴については個別地域における記述だけでなく、方言が比較的保存されている今、統一的かつ総合的な調査が望まれる。特にこの 10 年の間に宮古群島の交通事情は大きく変化し、平成 27 年には伊良部大橋も開通し、地域の言語生活に与える影響は必然である。このような社会状況、地理的状況の変化とともに言語変化が進む時代において、多くの地域における方言を言語資料として収集し、記録・保存が望まれた。さらに、このような社会状況のなかで、方言の継承に関する機運が高まり、教育、地域に本研究がどのように還元されるのかも考えながら研究を進める必要性があった。

２．研究の目的

本研究の目的は以下の３つである。①言語の変化過程の解明、②言語継承を存続させるための具体的な言語的特徴の提示と言語資料の作成、③言語継承のための学校教育における学習開発に向けての課題の提示と討究である。これら３つのことについて、具体的に述べれば、次のとおりである。①について、調査は分布調査を、音韻、語彙に焦点を定めて実施し、各分野について言語地図を作成し、分布状況を可視化して分析資料とする。これらの分布状況を言語地理学的手法によって、言語の変化過程を推定する。②について、データは学術研究だけでなく、広く社会一般の利用に向けて公開するもので、とくに地元への還元できるものを作成するように努める。若い世代が地域言語への関心を深め、地域文化の継承が促されるよう、音声付き言語地図等、教材としても活用できるようなものを目指す。③について、カリキュラム、教授者、地域などの観点から言語継承を学校教育において取り入れるための課題および、学習開発に向けての課題を追究する。

３．研究の方法

研究の方法は臨地調査と地理言語学における分析を中心とする。具体的には以下のとおりである。方言調査は宮古島・伊良部島・多良間島を対象とし、研究年度ごとに作成した調査票を用いた統一的な現地調査を実施する。調査は、音韻、語彙の調査を中心としておこない、適宜文法項目を追加した。調査項目の音韻、語彙において、詳細な分布を地理的に明示する。そして、分析については、得られた調査データを地図化し、言語地理学的手法による分析によって言語変化過程を推定する。具体的には音韻の変化過程についての解明を目指す。また、学校教育における方言の学習についての取組や課題についてのアンケート調査をおこなう。

４．研究成果

本研究の成果として「(1)方言研究の成果」と「(2)方言学習の課題」の側面からまとめれば以下のとおりである。

(1)方言研究の成果

①宮古群島方言に特異な音声特徴について、離島も含めたすべての地域を統一的調査票による調査でカバーした。②その結果、それらの音声特徴の歴史的発達に関し、言語地理学的手法を適用して検証することが可能になった。③発音特徴の検証に重要となる映像資料をほぼ全域について作成し、研究用だけでなく、現地次世代の方言継承にも利する資料が構築できた。以上のことについて、具体的に述べれば、次のとおりである。

①宮古群島方言に特異な音声特徴について

宮古群島方言については既に優れた調査研究が蓄積されているが、各地域の詳細な文法記述が主流であり、音声特徴に関しては各研究者がそれぞれの調査地で得た知見に基づいた議論に終

始し、また、一部の地域が他とルーツ的に異なるとの事情から、まとめて扱わない傾向もあった。本研究は重要な音声特徴に特化して、全 36 地点で詳細な調査を実施したが、それは、②に述べるように言語地理学的手法の適用を目的としたからである。

②言語地理学的手法による音声変化の推定
　その結果、図１「頭」のように、全群島域を比較することが可能になった。これまで一括して中舌母音的音声として扱われてきた諸音声の実態と分布域が明確になり、母音の中舌化⇒舌先の上部への極端な接近⇒そり舌側面音化、のような変化の過程の推定が可能になる。このように音声実態と地域差が測定できた。

③宮古群島域方言言語地図の作成
　本研究の成果を絶滅危機方言の次世代への継承に利する優れた資料として活用することが可能になった。なお、地図上に動画をリンクさせた『宮古群島域方言音声付き言語地図』をデモ版として作成した。

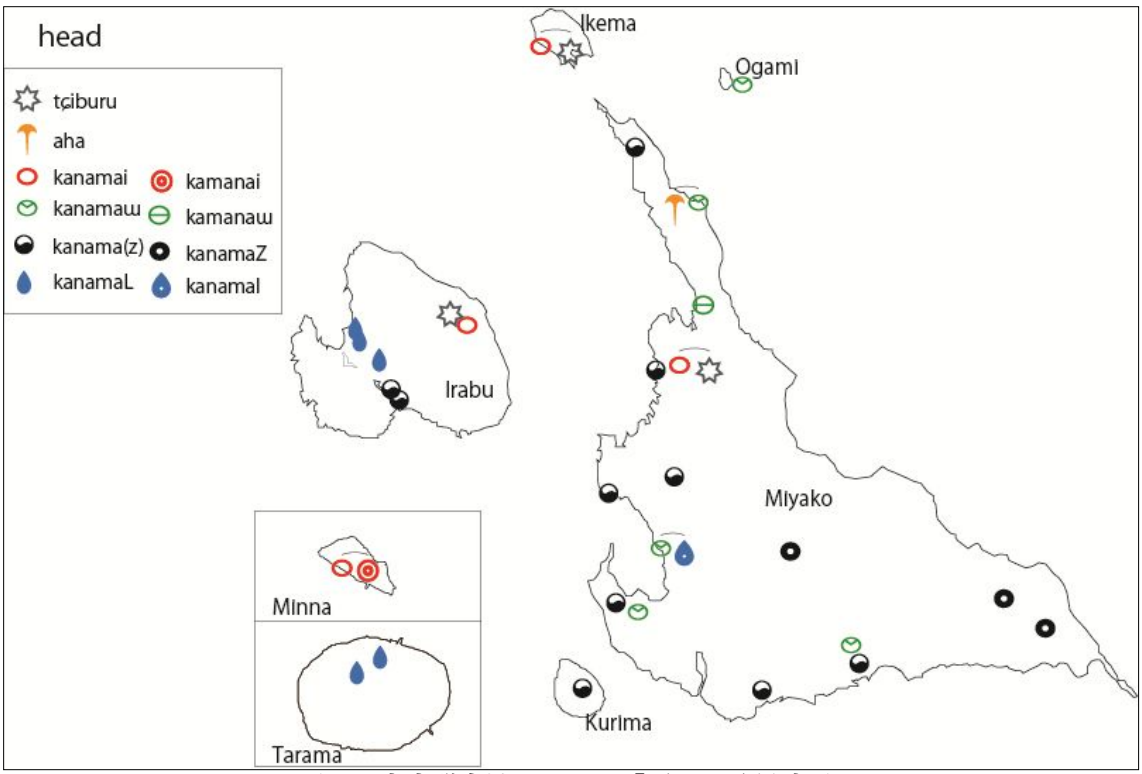

図１　宮古群島域における「頭」の言語地図

(2)方言学習の課題
　方言学習の課題として、①方言学習の目標について、②教員の方言学習に対する態度、③方言学習に必要な教材、④カリキュラム上の課題、地域の課題、の４つの観点からまとめる。
　先に、奄美諸島を含めた琉球方言圏全体における方言継承に関する状況を簡単に述べると以下のとおりである。琉球方言圏においては、地域方言の継承の機運が高まり、方言の記念日を定めたり、様々なスピーチコンテストなどのイベントがおこなわれたりしている。また、沖縄県教育委員会は方言の教科書を発行し、その教科書は生徒たちに配布されている。このような取組から、地域や学校教育においても方言の継承が意識されていることが分かる。一方で、様々な課題も多い。本研究では、特に、学校教育における方言の学習の取組についての課題をアンケート調査によってまとめた。以下は小学校教員を対象としたアンケート調査の結果をもとにまとめたものである。

①方言学習の目標について
　「宮古諸方言の学習を行うことで、子どもたちにどのようなことを身につけさせたいか」との質問に対して、下記のような結果が示された。「地域文化を理解し守っていく態度をはぐくむ」「宮古諸方言を話したり聞いたりする力の育成」「コミュニケーション力の育成」「多文化・他文化を理解する態度をはぐくむ」ことを主に学習・習得させたいとの回答が多く得られた。

②教員の方言学習に対する態度
　上記のような学習の目標を挙げながらも、学校で宮古方言を学ぶことについては、いくつかの課題がある。現場教員から挙げられた主な課題は以下の二つである。

ａ．発音（アクセント、イントネーションを含む）が難しい。
ｂ．地域差が大きい。

一般的に、若年～中年の人々は日常生活では共通語を使用しており、学校でも共通語が使用されている。そのため、教員自身が宮古諸方言の音声の発音を習得していないために発音ができないということが教員自身の課題として多く提示された。宮古の方言には、共通語にはない音声がいくつかある。たとえば、［l］や［ɨ］などは、共通語では使用されない音声である。宮古群島諸地域において、方言の学習の困難さの一つは音声の学習であるとも言える。しかし、学校教育において、「発音」に関する指導は国語や英語などの言語を対象とする科目にあっても充分になされているとは言いがたい。ゆえに、多くの教員にとって、発音指導はその目標や指導法において扱いが難しいものの一つであると言える。

③方言学習に必要な教材
「授業において宮古諸方言の学習をおこなうために、あるとよいと思うものは何か」という質問に対して、回答の多い順に、「ＤＶＤなどの映像資料」「ネットで視聴できるデジタルコンテンツ」「児童用、生徒用の図書」が挙げられた。「児童用・生徒用の図書」については沖縄県教育委員会が作成した教科書『しまくとぅば読本』『しまくとぅばハンドブック』の他、一般図書として方言で書かれた絵本や図書が一定数ある。ただし、代表的な地域の方言で作成されたものであるので、一定数あるとは言っても充分とは言えない。「ネットで視聴できるデジタルコンテンツ」「ＤＶＤなどの映像資料」についてもいくらかあるものの、学習用として整備される必要がある。本研究では、研究の目的の一つとして、「教材としても活用できる音声動画付き言語地図」の作成を目指したが、教育現場においても映像資料の必要性と需要があることが明らかになった。本研究では、試作として、中島由美（2019）『宮古群島域方言音声付き言語地図（デモ版）』を作成した。

④カリキュラム上の課題、地域の課題
教員の多くは方言の学習の意義や必要性を実感しているものの、方言の学習が教育現場で充分に取り組むことができないこととしてカリキュラム上の課題と地域の課題とがあることが浮き彫りになった。学校における学習時間は学習指導要領の内容が指導されなければならない。このようなカリキュラムにおいては、方言の学習に体系的に取り組む時間が確保しづらい。
また、地域の有り様も多様化している。「生徒の半数以上の親（両方 or どちらか）が他府県の出身者である」「市街地からの移住によってできた地域で、地域のつながりが薄い」といった実態の地域もある。このような社会の多様性が加速する時代における伝統方言の継承と保存の有り様も考えなければならない。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計　３　件）
①下地賀代子、南琉球・多良間島方言の「移動の表現」に関わる動詞の類型(2)－モノの移動の表現－、南島文化（沖縄国際大学南島文化研究所紀要）、第 40 号、査読無し、2018 年、pp.23-40
②下地賀代子、南琉球・多良間水納島方言形容詞の叙述断定の形式、沖縄国際大学日本語日本文学研究、第 22 巻第 1 号、査読無し、2017、pp.61-74
③Yumi nakajima、O percepciji srpskohrvatskih akcenat na osnovu japanskog jezickog osecanja（Zbornik Matice srpske na filologiju i lingvistiku,XIV/1(1981) 151-163, 改定のうえ再掲）、Serbica Iaponica、査読有り、2016、pp.99-110

〔学会発表〕（計　４　件）
①Shimoji-Kojima Kayoko, Yumi Nakajima, Satomi Matayoshi、GEOGRAPHIC DISTRIBUTION OF A SET OF PHONETIC FEATURES IN THE MIYAKO ISLAND GROUP、the 9th CONGRESS OF THE INTERNATIONAL SOCIETY FOR DIALECTOLOGY AND GEOLINGUISTICS（国際学会）、2018
②又吉里美、学校現場における方言の学習の取り組みと課題－インタビュー調査をもとに－、第 13 回琉球諸語記述研究会、2018
③下地賀代子、多良間方言の『基礎語彙辞典』作成の試み－実践報告－、第 11 回琉球諸語記述研究会、2016
④下地賀代子、多良間方言（多良間島・水納島）形容詞の叙述法断定の形式、2016 年度（第 39 回）沖縄言語研究センター研究発表会、2016

〔図書〕（計　２　件）
①又吉里美、中島由美、下地賀代子、宮古群島域方言音声の研究－「琉球方言発達過程解明のための宮古群島域における言語地理学的研究」に関する報告書－、私家版、2019、90
②下地賀代子（編著）、多良間村教育委員会、つかえる　たらまふつ辞典－多良間方言基礎語彙－、2017、435

〔その他〕
ホームページ等
①中島由美（2019）『宮古群島域方言音声付き言語地図（デモ版）』※宮古島方言の中舌母音を含む単語の音声動画付きの言語地図である。
②下地賀代子 監修（2019）『シュダツズマン パイル―たらまふつ副読本―』多良間村教育委員会

６．研究組織

(1)研究分担者
研究分担者氏名：中島　由美
ローマ字氏名：（NAKAJIMA，yumi）
所属研究機関名：一橋大学
部局名：その他部局等
職名：名誉教授
研究者番号（8 桁）：20155732

研究分担者氏名：下地　賀代子
ローマ字氏名：（SHIMOJI, kayoko）
所属研究機関名：沖縄国際大学
部局名：総合文化学部
職名：准教授
研究者番号（8 桁）：40586517

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。